

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370132

研究課題名(和文)バロック美術におけるカトリック改革の影響についての総合的研究

研究課題名(英文)Total study of the influence on art by Catholic Reformation

研究代表者

宮下 規久朗(Miyashita, Kikuro)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：30283849

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：カトリック改革が美術に及ぼした影響について、様式と図像の両面にわたって、対する宗教改革の果たした世俗化といった役割とともに広く考察した。具体的にはカラヴァッジョとカラヴァッジェスキを中心にバロックの美術家たちによる画像の意味や機能について研究した。また、教会や宮殿の美術だけでなく、版画やエクス・ヴォートなどの民衆的な画像についても調査し、考察した。さらにイエズス会の図像が伝播した例としてマカオの美術や日本の南蛮美術についても調査した。

研究成果の概要(英文)：I researched and studied about the influence on art in style and iconography by Catholic Reformation and the role of secularization by Reformation, specially about the meaning and function of the art by Caravaggio, Caravaggeschi, and other baroque artists. And I researched not only the art in churches and palaces, but also popular images of prints and ex-votos, and the art of Jesuit mission on non western world, specially Macao and Japan.

研究分野：美術史

キーワード：カトリック改革 カラヴァッジョ バロック 宗教改革 イコン イコノクラスム 南蛮美術

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、トレント公会議のカトリック改革と美術との関係について長年研究を行ってきており、16世紀末のローマ画壇とカトリック改革との具体的な関係についてあきらかにしてきた。とくにその中から登場したカラヴァッジョの芸術が、17世紀初頭のローマの教会や聖職者たちにとっていかなる意味をもち、いかなる役割を果たしたかについて調査研究し、幾多の論文や著書によって発表してきた。カラヴァッジョの芸術は後期マニエリスムの画壇において革新的であったことはたしかだが、それ以上に、オラトリオ会やイエズス会といったカトリック改革の推進教団の政策や意図と合致しており、それがゆえに多くの教会や聖職者に求められ、数多くの画家たちに影響を与えたということが、こうした研究の過程で具体的にわかってきた。

2. 研究の目的

ローマから波及したバロック様式が、イタリア全土、さらにスペイン、フランス、フランドル、ドイツ等に波及した際、カトリックの布教や勢力拡大を伴っていたことは周知の事実だが、17世紀半ば以降は絶対王政の宮廷文化と融合したため、盛期および後期バロックの様式はカトリック改革と分離されて考えられることが多い。しかし、王権と教会との複雑な関係や個々の美術家の活動を検討すると、そこにもカトリック改革の影響が看過できない。たとえば、1692年、リヒテンシュタイン侯からウィーンの宮殿装飾に招かれたポローニャの画家マルカントニオ・フランチェスキーニは、ヴィーナスを裸体で描くのを拒否しているが、そこにはパレオッティ以来のポローニャのカトリック改革の精神の残存を読みとることができる。また、17世紀末になってローマのイエズス会やドミニコ会の教会に大規模なイリュージョニスティックな天井

画が流行した。これは盛期バロックの天井画よりも一層宗教的で、カトリック改革の精神を具現したものといえる。そしてこうしたイリュージョニスティックな装飾が北イタリアやドイツ語圏で大流行した。

このように、後期バロックもカトリック改革の影響下に生まれたと見るができる。そこに見られるカトリック改革運動の伝播の実態について調査研究する。

3. 研究の方法

17世紀初頭のローマにおいて、カラヴァッジョほど研究の進んでいないカラヴァッジョの同時代の美術家たち、つまりローマの後期マニエリスト、ポローニャ派、フィレンツェ改革派などがいかにカトリック改革の教会や聖職者と関わったかについて調査する。ローマ、ポローニャ、フィレンツェ、ミラノの17世紀半ば以降の美術家たちは、重要な位置を占めているにもかかわらず作品総目録(カタログ・レゾネ)のないものが多く、個々の美術家についてはいまだ基礎的な史料が準備されつつある状況である。そこで、カトリック改革の生み出した典型的な主題である殉教、瞑想、悔悛、幻視といった主題の成立と流行を、版画と祭壇画を中心に、それぞれの地域での作例を収集し、その注文者と受容の状況を具体的に検討したい。それに基づいて、ジェロニモ・ナダル、フェデリコ・ポロメオ、パレオッティらカトリック改革期の重要な著作がいかに美術作品に反映したかについての細かな検討を試みる。

カトリック改革の動きが伝わりにくかったとされるヴェネツィアやジェノヴァ、トリノにおける状況も検討する。とくにヴェネツィアでは17世紀初頭にイエズス会が追放されるなど、教皇庁と距離をとっており、カトリック改革運動に非協力的だったにもかかわらず、17・18世紀にめざましい

バロック美術を生み出した。そのため、こうしたバロック美術にカトリック改革の思想が介在したかどうかを検討することは、後期バロック美術とカトリック改革との因果関係をあきらかにするために最適であると考えられる。

南ドイツ、バイエルン地方やオーストリア、あるいはスペインとポルトガルにおいては、カトリック改革の動きは18世紀にいたるまで強力であった。それらの地域に生まれたバロック美術は、イエズス会がその中心的な推進母体であったが、世俗君主の庇護も受けており、どの程度までこうした運動と連動していたかについて調査したい。

以上のような一連の調査により、広くカトリック圏の西洋における盛期および後期バロック美術にもカトリック改革が深く関与し、作用していたことを明らかにするものである。

4. 研究成果

平成25年度は、主に日本における南蛮美術について調査した。16世紀後半に日本にもたらされ、教皇庁や教団の画像をめぐる宣教方針についても、記録・資料と布教用画像との両面から調査した。17世紀以降の国内の南蛮美術の資料を調査し、従来の南蛮研究の成果を咀嚼して図像の分類やその意味内容についても考察を深め、いくばくかの成果を得た。また、この研究の主要な調査対象であるカラヴァッジョについても、最近の研究成果を咀嚼し、口頭で発表を行った。

平成26年度は、カトリック改革の影響が比較的少なかったとされていたヴェネツィアの17世紀美術に注目し、現地調査を含めて研究した。ヴェネツィアの17世紀は経済的な衰退やペストの流行によってめぼしい美術を生み出さず、サンタ・マリア・デラ・

サルデーテ聖堂に代表されるバルダッサレ・ロンゲーナのバロック建築以外は美術の暗黒時代とされ、土地の流派が衰退したとされていた。しかし、そこにはイタリアの他の地域と連動するバロック美術の豊かな成果が見られ、その背景にカトリック改革の思想があったと思われる。具体的には、ヴェネツィアのサン・ニコロ・ダ・トレンティーノ聖堂に設置されたベルナルド・ストロツィとヨハン・リスの作品の成立過程を探り、それがヴェネツィア17世紀美術にいかなる影響を及ぼしたかについて考察した。それは世紀半ばにヴェネツィアにきたナポリの画家ルカ・ジョルダノの様式がヴェネツィア画壇に決定的な影響を及ぼすことの土台を準備し、さらに18世紀の第二次ヴェネツィア派の隆盛に結びついたことをあきらかにすることができた。

平成27年度は16世紀後半から17世紀初頭のスペインにおけるカラヴァッジョの影響について調査した。スペインにおけるカラヴァッジェスキの展開については、いまだあきらかになっていない。しかし、ボルジャンニやカヴァロツィの来訪や、トレドのトリスタンやマイーノ、バレンシアのリバルタ、そしてナポリのリベラなどを通じてスペイン絵画に大きな影響を及ぼしたのはたしかであり、当時のセビーリャにおいてもカラヴァッジェスキは最新の流行様式であったと思われる。カヴァロツィとともにマドリードにやって来たローマの貴族ジョヴァンニ・パッティスタ・クレシェンツィは、フェリペ4世に仕えて建築家や静物画家としても活躍し、マドリードに写実的な静物画を流行させたことにも着目した。そうした環境で画風形成したベラスケスにカラヴァッジョの影響があったか否かについては、近年、否定派が優勢である。しかし、セビーリャにあったカラヴァッジョの《聖ペテロの磔刑》の模写がベラスケスの

いくつかの作品に影響していることを指摘することができた。これらを口頭発表し、論文「ベラスケスとカラヴァッジェスキ」にまとめた。

また、国立西洋美術館で開催されたカラヴァッジョ展のカタログ制作に関わり、「蠟燭の光の画家」などのカラヴァッジェスキについての考察を深めた。

平成28年度は、カトリック改革後にさかんになったエクス・ヴォートについて調査し、考察した。その中心地である南ドイツのアルトエッティングなどに調査に行き、関連資料を収集して論文にまとめつつある。エクス・ヴォートは、奉納物を神に捧げる太古からの風習だが、それが古代エジプトやギリシャを経てキリスト教に継承され、中世に教会の墓所や礼拝堂に掲げるエピタフと同化して15世紀にはフィレンツェを中心として奉納者の肖像を奉納する習慣となった。それがカトリック改革後には庶民の巡礼の流行とともに奇跡譚を描いた絵額が主流となり、今日にいたっている。欧米においてもその研究はそれほど多くなく、1972年のクリス＝レットンベックによる基礎的研究を除いて進んでいないが、その資料をできるだけ収集した。アルトエッティングでも、16世紀に始まったエクス・ヴォート奉納が、イエズス会による巡礼奨励と聖地宣伝によって17世紀から18世紀に全盛期を迎えている。エクス・ヴォートは神への報謝が主流であったが、その中には亡くなった者の冥福を祈願するTotentafelが多く見られることに注目し、日本の供養絵馬と比較して考察した。

平成29年度はカラヴァッジョとカラヴァッジェスキを中心に、画像の意味や機能について研究した。いくつかのバージョンのあるペンシヨナンテ・デル・サラチエーニの作とされる「聖ペテロの否認」について、その様式と図像、意味について考察し、論

文にまとめた。また、教会や宮殿の美術だけでなく、版画やエクス・ヴォートなどの民衆的な画像についても調査し、考察した。とくに、北イタリアやニーダーバイエルン地方に見られるエクス・ヴォートに供養や追悼が現れることがあることに着目し、広く文献調査を行うと同時に、日本の東北地方に特徴的に見られる追悼絵馬と比較して考察し、論文「供養と奉納」（単著『聖と俗 分断と架橋の美術史』所収）にまとめた。

さらにイエズス会の図像が東洋に伝播した例として、マカオの美術や日本の南蛮美術についても調査した。サン・パオロ聖堂やギア要塞といったマカオのキリスト教会の建築と壁画を調査し、そこに表れた漢字や竜といった非西洋的要素について考えた。また、「悲しみの聖母」をはじめとする大阪の南蛮文化館に所蔵される南蛮美術について調査した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計8件)

宮下規久朗「カラヴァッジョの芸術と人間性」『病跡学雑誌』87号、2014年6月、10-20頁。

宮下規久朗「湿潤な闇 - 日本のテネブリスム」『夜の画家たち - 蠟燭の光とテネブリスム』カタログ、ふくやま美術館・山梨県立美術館、2015年1月、12-22頁。

宮下規久朗、作品解説、コラム、『カラヴァッジョ展』カタログ、川瀬佑介、ロッセッラ・ヴォドレ編、国立西洋美術館、2016年3月。

宮下規久朗「ベラスケスとカラヴァッジェスキ」『公開国際シンポジウム報告集 ベラスケスとバロック絵画：影響と同時代性、受容と遺産』早稲田大学文学学術院、2016年11月、7-18頁。

宮下規久朗「ルネサンスを破壊した宗教改革」『文藝春秋スペシャル 入門 新世界史』2017年2月、48-55頁。

宮下規久朗「ヴァザーリとカトリック改革」『ヴァザーリ 美術家列伝』第5巻、中央公論美術出版2017年11月、503-510頁。

宮下規久朗「ベルニーニの総合芸術」『Art Library』19号、2018年4月、3-9頁。

宮下規久朗「否認と召命 伝サラチェーニ《聖ペテロの否認》をめぐる」『木村三郎先生退任記念論文集』2018年刊行予定。

〔学会発表〕(計12件)

宮下規久朗、招待講演「カラヴァッジョの芸術と人間性」日本病跡学会総会、大阪国際展示場、2013年7月27日。

宮下規久朗、招待講演「カラヴァッジョ - 聖と俗のはざままで」ぐんま人間学・精神病理アカデミー、群馬病院、2013年11月30日。

宮下規久朗、研究発表「『最後の晩餐』と『食』の美術」西洋中世学会、於京都女子大学、2014年10月18日。

宮下規久朗、招待講演「西洋美術と食」『関西外大研究論集』百号記念講演会、於関西外国語大学、2014年11月8日。

宮下規久朗、招待講演「日本の夜の画家たち」夜の画家たち - 蝋燭の光とテネプリスム」展開催記念、於ふくやま美術館、2015年1月24日。

宮下規久朗、招待講演「グエルチーノとバロック美術」「グエルチーノ展」開催記念、於国立西洋美術館、2015年4月11日、5月17日。

宮下規久朗、研究発表「ベラスケスとカラヴァッジェスキ」公開国際シンポジウム「ベラスケスとバロック美術 - 影響と同時代性、受容と遺産」於早稲田大学小野記念講堂、2016年3月4日。

宮下規久朗、招待講演「カラヴァッジョ芸術の革新性」国立西洋美術館「カラヴァッ

ジョ展」記念特別講演会、於東京、イタリア文化会館アニエッリホール、2016年4月2日。

宮下規久朗、招待講演「光と影のオランダ絵画」福島県立美術館「フェルメールとレンブラント-17世紀オランダ黄金時代の巨匠たち」展記念、於コラッセふくしま、2016年4月10日。

宮下規久朗、招待講演「ヴェネツィア美術の一千年」アカデミア美術館所蔵ヴェネツィア・ルネサンスの巨匠たち展」記念講演会、国立国際美術館、2016年12月3日。

宮下規久朗、招待講演「ヴェネツィア美術の魅力」ティツィアーノとヴェネツィア派展」記念講演会、東京都美術館、2017年2月18日。

宮下規久朗、招待講演「信仰と美術 - ルネサンスからバロックへ」大エルミタージュ美術館展記念、兵庫県立美術館、2017年10月7日。

〔図書〕(計6件)

宮下規久朗(単著)『闇の美術史 カラヴァッジョの水脈』(単著)岩波書店、2016年5月。

宮下規久朗(単著)『ヴェネツィア 美の都の一千年』岩波新書、2016年6月。

大野芳材、中村俊春、宮下規久朗、望月典子(共著)『西洋美術の歴史6 17~18世紀 バロックからロココへ 華麗なる展開』(共著)中央公論新社、2016年11月。

森田義之、越川倫明、甲斐教行、宮下規久朗、高梨光正(共著)翻訳と解題『ヴァザーリ 美術家列伝』第5巻、中央公論美術出版2017年11月。

宮下規久朗(単著)『美術の力 - 表現の原点を辿る』光文社、2018年1月。

宮下規久朗(単著)『聖と俗 分断と架橋の美術史』岩波書店、2018年5月。

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮下 規久朗 (MIYASHITA, Kikuro)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：30283849

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()